みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「さわる」で常識を疑う ([特集] "疑問"という知の世界)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008345

特集 〝疑問〟という知の世界

「さわる」で常識を疑う

●文化人類学者・国立民族学博物館准教授
広瀬浩二郎（ひろせ・こうじろう）

パソコン、携帯、テレビ、そして、目の前に広がる景色を、私たちは別段意識することもなく目にしている。常に何かを目で見て理解するという、圧倒的に視覚に頼った生活をしている。しかしながら、それで一体、どれだけのことが本当に見えているのだろう。パッと瞬間的に見ただけで、分かった気になってはいないだろうか。

盲目のフィールドワーカー・広瀬浩二郎氏は、「さわる」ことは、見えない世界にアクセスする方法のひとつだと言う。そう、私たちの世界は、宇宙において見えている部分が全体のたった一％と言われるように、見えない世界によって動いている。

見えない世界は、自分の頭で想像したり、どういうことなのかと疑問を持たない限りは見えてこない。「さわる」はその〝手掛かり〟なのだ。

さわって見えてくる見えない世界

昨日、僕はある絵をさわりました。日本画家である間島秀徳さんの「KINESIS（seamount）」という大きな作品です（P56・P61写真参照）。まず初めに、手を広げて動きながらさわっていきました。手のひらにゴツゴツした凹凸が当たり、例えるなら、日本神話の国造りのように、神様がかき混ぜたものがぽたぽたと落ち、海底から陸地がぼこぼこと生まれているかのような躍動感を感じました。

次に、指先を使って小さく細かくさわりました。すると、大きくザーッとさわったときには平らだと思っていたいわゆる海の部分も、実は結構、凹凸や流れがあることが分かりました。最初はゴツゴツして痛いなあと感じたところも、次第に手のひらになじむような気がしたりと、段々と印象が変化していったのが面白かったですね。

また、間島さんと話しながらじっくりさわっていると、一見するとバーッと大胆に描いているような絵から、緻密な考えや繊細さが見えてきました。間島さんからすれば、魂を込めて作った作品をさわらせるのはとても勇気のいることだと思うんです。作品の劣化に繋がるわけですから。それを許したということは、作品に対する自信もあるでしょうけれど、懐の深さというか優しさがあって、手のひらからも伝わってくる。そうやっていろんなことを感じられて、「絵にさわる」ことの可能性に自信を持つことができました。

視覚障害者が絵画を鑑賞する場合、大抵の美術館では言葉で対応しています。絵を言葉にすることから、イメージを膨らませるわけですね。言葉による鑑賞を楽しんでいる方はたくさんいますし、それはそれでいいと思います。

ただ、絵を見た経験のある中途失明の人であれば、言葉からイメージを作りあげていくことは難しくはないと思うのですが、僕の場合は中学一年生のときに失明したので、名画をはじめとする絵画を見たことがほとんどありません。ましてや、生まれつき目が見えない人からすると、説明を聞いたところで「ふーんそういうもんか」で終わってしまいがちなんです。これは非常にもどかしい。自分で能動的にさわって情報を得られるものがあれば、あるいは「ここはどうなっているの？」と自分から発信できるツールがあれば絵画の楽しみ方が変わるはずです。

実はここ数年で、絵画の輪郭を盛り上げたり、絵画全体を立体化したりと、絵画をさわって理解するためのツールが美術館などで使われ始めています。とはいえまだまだ数も少ないですし、二次元表現のものをあえて三次元にすることの是非や保存方法などの課題もあります。

さらに、それらが視覚障害者に絵を見せるための手段でしかないのなら、あんまり意味がないと僕は思っていま

す。〝バリアフリーという障害者対応〟ではなく〝ユニバーサルという誰もが楽しめるもの〟でなければならない。

なぜなら「さわる」ことは、視覚障害の有無に関係なく、あらゆる人の前に広がっている、見えない世界にアクセスする方法のひとつなのですから。

疑問と思考を促す「さわる文化」

僕が「さわる面白さ」に目覚めたのは、点字学習がきっかけです。小学五、六年生の頃にはもうだいぶ見えなくなっていたのですが、「まだ大丈夫だろう」となかなか点字を勉強する踏ん切りがつきませんでした。中学一年生で完全に見えなくなって初めて、真剣に点字を勉強したんです。第一印象は「こんなブツブツ読めるわけない！」でしたね。でもしょうがないから、「分かんねー」とかぶつぶつ言いながらさわり続けました。すると、ある日突然分かったんですよ。慣らしているうちに、パッと感覚が開いたというような感じでした。

僕は、幸か不幸かたまたま目が見えなくなって、触覚を磨かざるを得なくなりましたが、本来は誰しもが持っている能力です。赤ん坊は何にでもさわり、口に入れようとしますよね？　ところが、成長の過程で「さわってはいけません」と言われ続けるうちに、触覚があることを忘れていく。使わないから眠っているだけのことで、僕の指先にしても、特殊な力があるわけでも、敏感なわけでもなく、いたって普通の指です（笑）。

あまりに眠らせ過ぎると、今度はさわりたくなくなってしまうんです。僕は同僚とプロジェクトを組んで、二〇一二年に、国立民族学博物館で「世界をさわる」という常設の展示コーナーを作りました。時々、来館者の様子をうかがっているのですが、さわらない人が割と多いんです。それなりに面白いものを並べているつもりなのですが、見るだけですーっと通り過ぎていく人が多い。やはり、「博物館は見るところだ」と刷り込まれているのだと思います。それだけ現代は、「見る文化」が強いということでもあるでしょう。

ここまで世の中が視覚一辺倒になってしまったのは、やはり近代以降だと思います。より速く、より多くというのは「見る文化」の特徴とも言えます。ましてや現代は、スマホの操作など、指先一本で済ませられることも多く、触覚の存在になかなか気付けない。

国立民族学博物館に展示しているものは、ほぼすべて手で作られたものですし、手で使っていたものですから、本来であれば、さわって鑑賞するのは当たり前のような気もします。そう考えると、人々がさわらなくなってしまったことと、日常において手で作られたものが減っていることは関係があるのかもしれませんね。

少なくとも、どのようなさわり方でどういう情報が得られるのかをきちん

と伝えていく必要があります。例えば、繰り返しさわることは、点だった情報を面、そして立体へと広げ、あたかもパズルを組み立てるような面白さがあります。同時に、簡単には分からない難しさもある。また、指先や手のひらに集中し、しっかりじっくりと懸命にさわることで、最初の印象とは違うものが見えてくることもあります。

「さわる文化」は、さわって知るものの面白さであり、さわらなければ分からない事実、そして、モノとの対話でもあるのです。

「聴く」という感覚も弱くなっていますね。かつては、琵琶法師や瞽女といった、音で世界を伝える人たちが日常の中に生きていましたが、現代のわれわれが彼らの音からどれだけの世界を想像できるかというと、非常に心もとないし、おそらく映像が欲しくなる。

実際に、琵琶法師が語っていた平家物語は、変化も乏しくとても単調です。中世の人々はその音にじっと聞き入り、自分の中に歴史絵巻を鮮やかに描けたのでしょう。われわれよりもご先祖様たちのほうが、想像する力があったわけです。

「考える」ことも一緒でしょう。やはり見て分かった気になってしまえば、自分の頭で考えなくなるのです。

大量の情報を瞬時に得られる視覚とは違い、触覚で理解するには時間がかかります。しかし触覚は、「どうしてこうなっているのか？」というような疑問なり思考なりを伴うからこそ、対象への理解が深まっていく。僕の経験で言えば、パッと見て分かったような気になるのとは違って、記憶に刻み込まれる気がするのです。

広瀬　浩二郎　ひろせ・こうじろう
文化人類学者・国立民族学博物館准教授。1967年（昭和42）東京生まれ。13歳のときに失明。筑波大学付属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号を取得。専門は日本宗教史、触文化論。主な著書に、『触る門には福来たる』（岩波書店）、『さわる文化への招待』（世界思想社）、『万人のための点字力入門』（編著・生活書院）、『さわって楽しむ博物館』（編著・青弓社）、『さわっておどろく！点字・点図がひらく世界』（共著・岩波ジュニア新書）などがある。

「視覚を使えない不自由」「視覚を使わない自由」

視覚に頼ってばかりいると、身体感覚も鈍感になっていくんじゃないでしょうか？　さわるという能動的な動きをすることで、身体感覚も変わってくるはずです。例えば、絵にしても彫刻にしても、身体を動かしながらさわっていると、作品のエネルギーが自分の中に満ちてくるようで、だんだんと元気になってくるんですよ。

昨日は作品に触れたことでずいぶんと気分が高揚したせいか、今朝は早朝に目が覚めてしまいました。知的興奮状態が続いていたんですね。あの作品は、見ても迫力を感じるのでしょうけれども、やっぱりさわったことが大きいように思います。

先ほど、「絵にさわる」ことの可能性に自信を持ったと言いましたが、僕がさわるところを目が見えている人たちが見ることで、少しでも「さわる文化」が広がればいいなという期待もあります。

僕が美術作品にさわるときは、常に真剣勝負です。意識を集中させ、想像力を働かせて一所懸命にさわる。そういう現場を見てもらえれば、何かを感じてもらえるかもしれない。なんだか楽しそうだからさわってみようという人が現れたり、実際にさわらずとも、「さわるように見る」ようになるかもしれない。パッと見て分かったような気になるのではなく、一点に集中して徐々に視野を広げていったりと、いままでとは違う視覚の使い方をするだけでも、すごく意義があるんじゃないかと思います。

視覚以外の感覚に気付く手立てとしては、ダイアログ・イン・ザ・ダーク（ＤＩＤ）という暗闇体験のワークショップが有名です。ＤＩＤは、いわゆる健常者と障害者の間に横たわる「壁」を崩す試みとしてドイツで始まり、現在は世界各地に広がっています。日本でも、東京と大阪で実施されています。

ＤＩＤでは、視覚障害者の案内で、暗闇の中で風の音を聴き、床の感触に注意を向け、コーヒーなどの香りを満喫しながら、視覚以外の感覚を引き出していきます。「視覚を使えない不自由」ではなく、「視覚を使わない自由」を体験できるワークショップとも言えますね。

僕も、ＤＩＤを多少意識しながら、暗闇体験のワークショップをやるのですが、一つ疑問に思うことがあるんです。確かに暗闇では、聴覚や触覚などの視覚以外の感覚に気が付いたり、視覚障害者に対するイメージも変わるかもしれません。

でも結局、暗闇を出てしまえば視覚中心の日常に戻るわけです。非日常で得た経験に何らかの影響を受けるとは思うのですが、わざわざ非日常を作らなきゃ伝わらないのか、と。

僕としては、暗闇という装置を使わ

写真提供／堀江武史（P56同）

ずに「さわる文化」を伝えたい。やはり視覚は便利なので、瞬間的に見てから後づけでさわることもあるとは思います。とはいえ、先ほどの琵琶法師の話じゃないけれども、僕らのご先祖様たちは、視覚を使いながらも他の感覚を自由に使っていたわけですから、やってやれないことはないんですよ。

視覚に束縛された人たちが、「さわる」ことを通じていろんな常識を疑い、ひいては森羅万象を捉え直していく。「さわる文化」は、近代文明を再検討するための、まさに〝手掛かり〟になると僕は確信しています。

障害って何だ？ 常識って何だ？

僕はいわゆる障害者ですが、障害ってよく分からないんですよ。障害のない人は健常者と呼ばれているけれども、目は見えても健康じゃない人はいくらでもいますし、僕のほうがよっぽど健康だよな、と思うことのほうが多いく

らいです。

また、社会的不利益を被っているという意味においては、目が見えない僕と、耳が聴こえない人は共通しています。しかしながら一方では、視覚障害者と聴覚障害者は世の中で最も遠いところにいる者同士なのです。視覚障害の僕は聴覚を使い、聴覚障害の人は視覚を使っているわけで、直接コミュニケーションをとるのはものすごく難しい。そうしたことひとつをとっても、障害という言葉でひとくくりにするのは非常におかしなことなのです。おそらく、社会の多数派は、自分たちとは違う人たちを、「特別な人」という枠に入れておくと楽なんですよね。

障害は克服すべきものだという空気もあります。あるいは、「障害を持っている人は一所懸命頑張っている人、かわいそうな人だから、手助けをしてあげましょう」という見方が一般的です。もちろん僕は、この社会の中ではマイノリティですし、いろんな人の手助けや親切があって生活しています。だけど、そういう関係性だけで終わるのかと思うと、苛立ちを感じるのです。

実は、障害への見方は、時代によって変化しており、戦前と戦後の国語の教科書を比べてみると、それがよく分かります。

戦後で言えば、一九九六年に、盲学校の先生をされていた大島健甫さんのエッセイ「手と心で読む」が小学四年生の国語の教科書（光村図書出版）に掲載されて、いまに至っています。そこには、病気のために中途失明した大島先生が苦労して点字をマスターし、教員となって自立していく様子が描かれています。

聖徳太子像の輪郭を盛り上げた「さわる絵」

大島先生の文章は、視覚を使えないハンディキャップを頑張って克服して生きている、という実体験でもあるし、非常に説得力のある素晴らしいエッセイだとは思います。ただ僕としては、障害とは不自由かつ不便であり、克服すべきものであるという前提が気になってしまう。

では戦前の教科書はどうだったのかというと、小学校四年生の国語読本には、江戸時代の国学者である塙保己一（一七四六―一八二一）が登場していました。

彼が生きた時代は点字もありませんし、学問の道で生きるのは本当に大変だったと思いますが、塙先生は、『群書類従』という、古代から江戸時代初期までの史書や文学作品を校訂、分類した叢書を刊行します。『群書類従』

は、現在でも日本史や日本文学を研究するための必須文献ですから、たいへんな功績を残したわけです。教科書に掲載されていたのは、彼が開いていた私塾でのこんなエピソードです。

塙先生が源氏物語の講義をしていると、風がふうっと吹いてきて、蠟燭の火が消えてしまった。生徒たちは目が見えるので、蠟燭の明かりがないと文字が書けません。塙先生はそんなことには気付かず、滔々と語り続けるわけですね。そこで弟子の一人が、「先生、蠟燭の火が消えてしまったのでノートがとれません。ちょっと待ってください」とお願いした。すると塙先生は、「さてさて、目明きとは不便なものだ」と言った、というものです。

「目明きは便利で、めくらは不便」という世間の常識は、風がふうっと吹いたらパッと消えてしまうくらいのもので、簡単にひっくり返るものなんですよ。おそらくこれを読んだ生徒たちは、「あれっ？」と立ち止まらざるを得なくなるはずです。前者と後者では、障害に対する見方がまったく違うのです。

小学校四年生というちょうど自我が芽生えてくる時期に、さてどちらの教材で勉強するのが、自主性を引き出したり、自分の頭で考えることを促すのかというと、僕は塙先生のエピソードのほうがいろんなことを考えさせる要素があると思います。

戦前の慣習は否定されることが多いのですが、こういう教材を教科書に載せるセンスはなかなかいいですよね？残念なことに、戦後以降は、一度だけ道徳の教科書で復活したものの、めくらだとか目明きといった表現は差別的だということで、採用されなくなってしまいました。

障害というのはナンセンスで、いずれは消えていく概念だと僕は考えています。ただ、矛盾するようですが、多数派に声が届きにくい現状を考えると、マイノリティならではの暮らしにくさを抱えている人たちが連帯することも、時には必要な気がしています。

僕は、同僚に比べて、講演をさせてもらう機会も多いし、昨日のように、貴重な作品にさわらせてもらうといった、マイノリティだからこその特別な経験をたくさんしているわけです。「マイノリティで良かったな」という気持ちもどこかにある。いい面もあれば悪い面もあって、どっこいどっこいかな、なんて思ったりもします。障害をどう見るかというのは、理屈では割り切れない、なかなか難しい問題です。

しかし、障害とは何かと多くの人が疑問を持つことで、社会を変えていくことができるのではないでしょうか。

僕は、自分のことを、触覚に依拠した生活をする人という意味で、触常者と呼んでいます。触常者である僕には、「さわる文化」を発信し、現代社会に疑問を投げ掛けるという大きな役割があります。すでに手応えは感じている。あとは、手探りで進むのみなのです！